未来

　　Puney　Loran　Seapon

夜が、赤く染まっていた。

季節は冬のはずなのに、ひどく暑くて、息苦しい。なにより、辺り一帯が煙と血と生き物の焼ける臭いで充満していたのが、クレア・リングイストをガクガクと震えさせていた。

先月十歳の誕生日を迎えた、その少女は、知る。

これが、戦争。

傍から見れば、小国同士の、さらにその中でも一部の地域の民族同士の争いごとでしかないのだが、そんなことは彼女には関係ない。

　父と母は、きっと死んでしまった。敵の人間に見つかった時、親の最後の意地なのか、愛する我が子だけは逃がそうと、必死で抵抗したのだ。

もう、今までクレアが住んでいた家は戦火で焼けてしまった。今いるここが、かつて彼女達の住んでいた家のある場所だった。

戦いが終わるまで、ここに隠れていよう。そう思っていたのだが……屋根は吹き飛び、壁が壊れて玄関の方からは丸見えになっているここでは、隠れていられるのも時間の問題だろう。

もう、いいや。

　クレアは、生きることを諦めた。親はいない。住む場所も失った。仮に生き延びることが出来たとしても、この先、生きていくあてはない。そう思って、彼女は目を閉じた。

　その時だ。

「――おいっ！　そこに誰かいるのかっ？」

　誰かの声がして、目を開ける。

　煙のせいで、よく見えない。だが、どんどんとこちらに近づいてきていた。クレアは思わず身構える。もういいや、と思っても、反射的に体が反応した。

　やがて、そいつが姿を現した。

自分より、少しだけ大人びている、銀髪の男の子。

クレアは思わず小さく悲鳴を上げた。

両手に持つ、片側だけしか刃がない、二本のナイフ。

そしてそれ以上に、彼が自分達の敵である『人間』だということに、クレアはひどく恐怖した。

だから、

「……怖かった、よな？　もう大丈夫だから……怯えなくていい」

　そう彼が言ったことに、クレアはとても驚いた。

　シオン・アーグレスカ。

　それが、後にクレアが一緒に暮らすことになる、男の子の名前だった。

――数年後。

ここは商業都市、マートス。

　南東に広がっている海を除けば、高さ十メートルほどの外壁で囲まれている都市だ。

　北に広がるのは、『鬼人』と呼ばれる、見た目に関しては額に小さな角が生えている他は、人間と大差ない種族が作り上げた、小さな村が広がっている。

　その都市から、西に広がるのは『人間』達の作り上げた王都。

　王都は、以前はその『鬼人』と呼ばれた種族が創った、大都市で栄えていたのだが……あの戦争で、一夜にして滅んでしまい、今は人間が占領している。去年、城がようやく移転した。

　マートスは、以前は王都だったところを、商業都市に変えたのだ。そして鬼人は、差別の対象となっている。

　人間と、鬼人との間に出来た溝は、海よりも深い。

　そんな中だが、シオンと、鬼人であるはずのクレアは、このマートスの兵士として働いていた。

　まあ働いている、といっても、昼間は都内の見回り（と称した散歩）をしているか、門番の仕事（と称したサボり）をしているかの、どちらかなのだが……ごく稀に、忙しい時がある。基本的に、二人が番をしている門に、誰かがやってくることは少ない。それもそのはず。

　そこは、鬼人達の村に最も近いところに面したところにある門だからだ。北門。こっちから入ってくれば、ほぼ間違いなく殺されると分かっていて、誰が入ってくるものか。

　とは言え、命知らずもたまにいる。二人が忙しいのは、そんな時だった。しかも忙しいとは言っても、他の仕事に比べればという話で、大抵は軽くあしらうだけで鬼人は逃げる。

　しかし、今日は勝手が違った。

　人間と鬼人。見た目だけなら、額の角あるなしでしか判断出来ない。見た目だけ、ならば。

　身体能力に目を向ければ、少しだけ鬼人は人間に勝っていた。

　普段からクレアと一緒にいるとは言え、人間との身体能力の差を、シオンは今日ほど目の当たりにした日はなかった。

　昼間は喧騒で賑わっているこのマートスも、真夜中の三時にもなれば流石に静かになる。

　その、鬼人の村に一番近いところの門の場所を除けば。

　銀髪のシオンと水色の髪のクレア。二人の他に、紫髪の女性の鬼人と数人の男の鬼人が戦っていた。

「……ふんっ」

「にゃろう……っ！」

　空気を切り裂くような、全長三メートルはあるの一閃。

穂先が、鼻の頭を僅かに掠めたのを感じて、思わずシオンは呟く。

目の前の紫髪の女性は、クレアや自分と同じくらいの年だろうとシオンは推察したが、よもやこうも苦戦するとは思わなかった。油断していたのだ。

腰の辺りまで届いた長髪。やや日に焼けた、それでいて色気のある肌だけ見れば、とても『戦える』とは思えない。だが、こちらを射抜くような鋭い二つの眼球と、小さいながらも鋭く尖った角を見れば、恐ろしいまでの殺気を感じるには十分なはずだった。

にも関わらず、少しだけシオンが気を緩めてしまったのは、揃いも揃っておっさんのような風貌の鬼人に囲まれてやってきたためか、はたまた彼女を『美人』だと思うほどに顔が整っていたためか。

　しかし、油断していたことを除いても、彼女は強い。

　ただ単に、人間に対する恨みや憎しみでやってきた鬼人は、これ程までに強くはなかった。

　先程から、隙を見てはクレアの方をチラチラと見ているが、それが理由だろうか。

　シオンは、そんなことを思いながら、少しだけイラっとして、片手にのみ持っていたナイフを強く握る。

「お前の相手は……俺だっての！」

　そう叫んで、シオンは地面を蹴る。まるで「お前のことなど眼中にない」と言わんばかりのことをされては、兵士の中ではそこそこ強い部類に入る彼のプライドにも傷が付くのだろう。

　それに気づき、迎え撃つように顔面へと突かれる斧槍を、シオンは首を僅かに傾けることで躱す。

　このままいけば、伸ばしきった彼女の腕が戻る前に、シオンのナイフの一撃が決まる。だが、

「――っ」

　シオンは咄嗟に、横に飛ぶ。刹那、さっきまで彼が居た場所を、斧槍が通った。

　一回転させたのだ。伸ばした腕の、指の力だけで。

　相当な重量があるはずなのだが……と、シオンのこめかみから一筋の汗が流れ落ちる。

　間髪を入れずに、シオンは伏せる。頭上を、斧槍が通り過ぎていった。そして流れるように頭上から振り下ろされた一撃を、右腕で地面を叩き、その反動で横に飛んで避ける。

　もう一度地面を蹴って突っ込むシオンの喉元をめがけて、彼女は斧槍を振り上げた。シオンはそれも、ギリギリでバックすることによって躱す。

　が、少しだけ浮き上がった彼の足元を、彼女は見逃さない。振り上げた斧槍の軌道を変え、石突の方で彼の足を払う。グラと揺れるシオンの体。そしてそのままの勢いで、体勢を崩した彼の胴体に、斧槍を再び振り下ろした。

　僅かでも宙に浮いているシオンに、この攻撃を躱す術はない。

　万事休す。シオンがそう思った時だ。

　真っ直ぐ下ろされる斧槍の柄の下に、剣が入り込んだ。

　そしてそのまま、斧槍を上に跳ね除ける。

　距離を取る鬼人と、シオンの間に入ったのは、

「シオン、大丈夫ですかっ？」

「……げほっ。た、助かった、クレア！」

　彼女と同じ鬼人。クレアだった。

　間違いなく重いであろう斧槍を、片手で持った剣だけで弾き返すところは、流石は鬼人だ。

　紫髪の彼女とは対照的に、首が隠れるかどうかというくらいの長さの水色の髪を舞わせて、クレアは彼女をキッと睨む。

　背中から地面に落ちたシオンは、息苦しいのを堪えて立ち上がる。ついでに周りに視線を向けると、おっさん風の鬼人は全て、気絶させられていた。

「あなた、私達と同じ鬼人ね？　何故人間の味方をするの？」

　クレアが何か言う前に、紫髪の鬼人が低い声でそう聞く。

「シオンは、命の恩人ですから。私だって、全ての人間の味方などではありません」

「……そう」

　紫髪の鬼人がそう言うと、不意に音がした。そっちの方を見ると、気絶していた鬼人の一人が、目を覚ましたようだ。そして彼女を見て小さく首を横に振ると、紫髪の鬼人は溜息を吐いた。

「……撤収よ」

　そして、勢いよく斧槍を振る。

　シオンとクレアは反射的に後ろに飛び退いたが、斧槍の穂先が切りつけたのは地面。

　舞った土が目くらましになっている間に、敵の鬼人は、気絶した仲間を抱えて逃げていった。

「ちょ、待ちなさい！」

「いや、クレア。深追いするな」

　追いかけようとするクレアを、シオンは手で制す。目的は鬼人を捕まえる事ではないからだ。追っ払っただけでも、最低限の仕事はしたのである。

「……ん？」

　ふと、地面に何かが落ちているのを見つけ、シオンはそれを拾い上げる。小さな麻の袋で、中には厚紙が一枚入っているだけだった。大きさから見て、お守りか何かだろう。多分、さっきの鬼人の女性が落としたもののようだ。

「ラナシスタ・アークヴェル……」

　それが、彼女の名前だった。

　次の日。

　北門近くにある小屋。当直室として使われているそこは、シオンとクレアにとって家同然の場所だ。だって使っているのは二人だけだし。勿論シオンは自分の家は他にあるのだが、大体この当直室で寝泊まりしているので、向こうが『家』だと言われても、いまいちピンとこない。

　そんなシオンの一日は、鳥の鳴く声で目を覚ますところから始まる。

　そして大抵、クレアを正座させる。

「あのね、クレア」

「……むぅ」

「むくれても駄目だ。君のベッドはあっち」

　そう言って、シオンは窓際に置かれた、そこそこ上質なベッドを指差す。

「そんで、俺の寝床はこっち」

　次に、今自分が立っている場所に指を動かした。そこには、よれよれのブランケット。かろうじて、寝具として機能しているレベルだ。

「どう考えてもベッドの方が寝心地がいいのに、どうして毎日毎日、俺の方に潜り込んでくるんだよっ？」

「だってぇ、一人じゃ寂しいんですもん。シオンが私のベッドに潜り込んできてくれるなら、万事解決するではありませんか」

「何も解決してないっての！」

　シオンは溜息を吐く。数年前からクレアと一緒に暮らしているのだが、どういうわけか彼女には人が寝ているところに潜り込む癖があるらしい。クレアは昨日のラナシスタという鬼人に負け劣らず可愛いので、シオンにとってはかなり心臓に悪かった。

「いいかいクレア。俺も君も、もういい年なんだから、恥じらいとか貞操管理とか、もっとこう……」

「ていうか、シオン。やっぱりベッドをもう一つ買いませんか？　こっちは少し体が痛くて」

「そう思うなら、こっちに入ってくるなよ……。大体、ベッドをもう一つなんて無理だって。狭くなるんだから」

　二人暮らしでも、そこそこ広い部屋とはいえ、ベッドを二つ置くと、少し手狭になってしまう。

「そうですか？　ベッド一つくらい余裕だと思いますよ？　今のままでも、もう一人家族が増えても、十分暮らしていける広さはあると思いますが」

「年頃の男の子にそういうこと言うのやめて下さい……」

　意識しちゃうんで、とは言わずに、シオンはクレアから顔を背けた。

　結局諦めて、二人で協力して朝食の準備を始める。こんな毎日だ。

「シオン。今日はまた、都内の見回りですか？」

　朝食を食べている最中、クレアがそんなことを聞く。

「まー、そんなところだろうな。適当に回って、適当に報告して、そんで暇な門番の仕事かな？」

「もっと真面目にやりましょうよ……。本当にいいんですかね？　鬼人の私がこんな感じで仕事をしていて」

　クレアがこめかみを抑えて、やれやれといった感じで首を左右に振る。

「いつものことですが、昨日だって侵入してきた鬼人を追い払っただけですし……よく怒られませんよね、私達」

「そこはまあ、俺達の上司が『人間と鬼人の共存』に理解のある人物で助かった、ってところかな？　多少の不始末はあの人が握りつぶしてくれるし」

「今日、新しい胃薬が発売されるそうですよ？　あの人に買っていきましょう」

　こんな会話は、人前では出来ない。『人間と鬼人の共存』なんて、今の王都からしてみれば反逆もいいところだ。本来なら、昨日のような鬼人は殺しておく必要があるのだが、シオン達はこれまで、一人も殺さず見逃している。勿論、わざとだ。バレれば即、クビである。

　そんな危険を冒してまで鬼人を逃がしているのは、シオンとクレア、そして上司や数少ない仲間達が、『人間と鬼人の共存』を実現させるためだ。

　俺達は、何をしているんだろう。

　あの日の戦争で、それぞれが、ひどい虚無感、虚しさ、形容しがたい後味の悪さを感じたのだ。もう二度と、あんな戦争はしてはならない、そう思った。

　鬼人なんて、人間と比べて、少しばかり身体能力が高い程度の違いしかないのだ。迫害していい理由なんて、どこにもない。

　今のところの目標は、国王の失脚。クーデターも考えてはいるが、それはあくまでも最終手段。なるべく犠牲は少ないほうがいいからだ。何年かかるか二人にも分からないが、必ず実現させるつもりだ。

　ちなみに当然、クレアが鬼人だということは、上司や仲間達も知っている。

「さて、飯も食ったし、片付けて仕事するか！」

「ほとんどサボっているようなものですけどね」

　気合を入れるシオンに、クレアは苦笑いで呟いた。

　真面目に仕事をしているやつなら、都内の見回りというのは中々に忙しい仕事である。

　と、いうのも、鬼人達の村は土が悪くて、作物が育たない。

　だから、王都側の門や、港から、こっそりマートスに忍び込んで、食料の買わなければならないのだ。見回りの仕事は、そんな『忍び込んだ鬼人』を捕まえて、王都に引き渡すことである。鬼人と人間の外見的な違いは、角のあるなしでしか判断できず、鬼人だって馬鹿じゃないから、当然角は帽子か何かで隠しているので、割と神経を使うのだ。

　が、しかし。シオンとクレアにとっては、そんなこと知ったことではない。寧ろ、鬼人だと分かった場合は、本人にそれをこっそり教えて、隠すように注意するくらいである。敵対するのは、昨日のように、鬼人の方から襲ってきた時だけだ。

　だから二人は、いつものように、酒場のマスターのところに顔を出したり、行商に新商品はないか聞いたりと、なるべく目立たないように散歩していた。当然、クレアは額の角を帽子をかぶって隠している。

「そう言えばシオン。昨日何か拾ってましたけど、なんだったんですか？」

　その途中、クレアが聞いてきた。『あれ』とは、お守りのことだろうと察したシオンは、ポッケからそれを取り出す。

「これのことか？　多分、昨日のあの紫髪の鬼人が落としていったものだと思うが……」

「あー、これ」

　すると、珍しいものを見た、というように、クレアがシオンの持つ小さな麻の袋を指さした。

「中に、厚紙が入っていませんでしたか？」

「あー、そう言えば」

「やっぱり、メモリーシートですね。懐かしい。私も昔、持っていたんですけどねぇ……」

　懐かしそうに目を細めたクレアに、シオンは少しだけ間を置いてから、尋ねる。

「メモリーシート？　なんだそれ？」

「シオンは知らないんですか？　昔、流行ったと思いますが」

　そう言われて、シオンは唸る。言われてみれば、そんなものもあったような気がしたが、どんなものだったかは、イマイチ思い出せそうにない。

「ほら、あれですよ。自分の記憶を、記録しておける紙です」

「あー……なんかあったな、そんなの。楽しかった思い出とかを、後で、まるでその当時に戻ったかのように体験出来るんだっけ？」

「実際は、見てるだけですけどね。自由に動けるわけじゃありませんし、食べ物の味とか、匂いとか、物に触れた感覚とか、そんなものも記録されませんし」

「本当に、映像だけなんだな……」

「流行ったと思ったら、すぐ廃れちゃいましたしね。そんなものですよ。

　指で擦れば、シートに記録された映像を見ることが出来ますが、どうします？」

「えっ？　これって他人も見れるのか？」

　シオンの問いに、ええ、とクレアは答える。

　そう言われれば、非常に気になった、というのがシオンの本音だ。

　だが、少し長い間考えて、シオンは首を横に振った。

「止めておくよ。勝手に見るのは、気分良くないだろうし」

「ふふっ、シオンはそう言うと思ってましたよ」

　どうやら、答えが分かった上で、敢えて質問したらしい。やれやれ息を長く吐いて、シオンはそのメモリーシートの入った麻の袋をしまった。

　そして、適当な店で昼食をとってから、再び二人でブラブラしていた時だ。

「……っ、シオン。何か聞こえませんか？」

「なんだ？　どうした？」

「……こっちですね」

　そう言うと、クレアは音のしたらしい方向へと足早に進んでいく。シオンも慌てて彼女を追った。

　二人が向かった先は、人目につきにくい、店裏の薄暗い場所だった。

　ある程度広さのある場所。そこで二人が見たのは、

「何をしているんですかっ！」

「あー……なるほどね」

　ガタイのいい三人の男が、紫髪の、二人と同じくらいの年の、倒れた女性を囲んでいるところだった。

　女性は、気絶しているのかピクリとも動かない。あちこち蹴られたり殴られたりされたのか、アザも見える。

　シオンは見た。髪の毛で隠れた額から、うっすらと小さな角をのぞかせているのを。

　もっとよく見れば、シオンは彼女が昨日戦った、ラナシスタだということに気が付いた。

「何……ってよう。見りゃ分かんだろ？」

　男のうち、リーダー格らしきやつが、下品なニヤケ顔でクレアに向かってそう言う。

「この女は鬼人だ。鬼人は危険なんだ。見かけたら始末しておかねーとだろう？　言っちまえば、害虫駆除だよ。が・い・ちゅ・う・く・じょ。がっはっは！」

　そいつに釣られて、他の男二人も笑い出す。何がおかしいのか、シオンには全く理解できなかった。

　内心で溜息を吐きながら、ちらりとシオンはクレアを見る。流石にこの仕事を何年もやっているだけあって、激昂するようなことは無かったが、男達を見るその目に光はない。

「クレア、向こうに行っとけ」

「なっ？　シオン、ですが……っ？」

「いいからいいから」

　このまま放っておくと、ボロが出そうだと判断したシオンは、取り敢えずクレアをここから追い出した。そして、ツカツカと男達の方へと詰め寄る。

「お、おう。なんだ。兄ちゃんも、やりてぇのか？」

　ややたじろぎながらも、男はニヤリと笑いながら小声でシオンにそう聞いてきた。どうやら、暴力を振るうに飽き足らず、この場で彼女の体を堪能するらしい。

「あー、そうしたいのは山々なんだが……俺って、これでも王都の兵士なんだわ」

「……は？」

　俺の言葉に、男は眉を顰める。

「ほら、知ってるだろう？　俺等ってさ、鬼人は王都に突き出さないといけないわけ。で、その検挙率が高けりゃ、出世にプラスなんだよ。ボーナスも出るし」

「あ、ああ」

「で、俺もそろそろ見回りの交代の時間でさ、とてもじゃないが、お前等が楽しみ終わるまで待ってらんねーの。つーわけで、俺の金と地位のために、その鬼人は諦めて、こっちに寄越しな」

「なっ？　そりゃねーぜ兄ちゃん！」

　慌てたように叫ぶ男に、他の二人も「そうだそうだ」と喚く。

　この反応は予想通りなので、シオンは男の胸ぐらをつかんで引き寄せ、自分の顔を近づけた。

「……あ？　なんだよ。小市民如きが、王都直属の兵士サマに逆らうわけ？　いや、あれならよ、適当な理由をつけて、お前ら全員牢獄にぶち込んでもいいんだぜぇ？　なぁ？」

　シオンはそう言って、中々に邪悪な笑みを浮かべる。

　男はしばらく口をパクパクしていたが、やがて舌打ちをすると、ブーたれている仲間を引き連れてこの場を去っていった。

「……おい、大丈夫か？」

　しばらくしてから、シオンはラナシスタに声をかける。返事はない。やはり気絶しているようだ。

　仕方ないか、と、シオンはラナシスタを担いで、クレアの元に戻る。戻ると、クレアは頭を抑えて溜息を吐いていた。どうやら、さっきの一部始終をこっそり聞いていたらしい。

「全く、あなたという人は……」

「はっはっは、権力ってのは、ああやって使うんだよ」

「胃薬、もう少し買っておいた方が良かったですかね……？」

「それよりさ、この子の角を隠すのに、何かもってないか？」

　そう言って、シオンはビリビリに破かれた布を見せた。落ちていたから、拾ってきたのだ。どうやらあの男達に破かれたらしく、とてもじゃないが角を隠すのには役に立ちそうもない。

　クレアもそのことに気がついたようで、慌てて自分の持っていた適当な布を、ラナシスタの額に巻いた。応急処置だが、ないよりはマシである。

　彼女を担いで、二人は北門に向かった。あそこからなら、安全にラナシスタを逃せる……そう思っていた。

「……う、ぅぅん？」

　ようやく北門についた時、どうやらラなしスタは目を覚ましたようで、シオンの背中でモゾモゾと動いた。

「げ、目が覚めたか？」

「……みたいですね」

　まだ頭が覚醒しきっていないらしく。しばらくは辺りをキョロキョロと見て、シオンとクレアを交互に見る。

　だが、ようやく二人が誰かということに気がついたのだろう。

「貴様達は……っ！」

　おぶっているシオンの背中を蹴って、ラナシスタは飛んで、二人から少し離れたところに着地した。

　ラナシスタは、どこからともなく短めな棒を取り出して、軽く振る。すると、棒は伸びて、昨日振り回していた斧槍に形を変えた。

「――っ！」

「クレアっ？」

　そして、ついでと言わんばかりに、石突の方で、剣を構えかけていたクレアの顎を打つ。クレアはグラっと揺れたかと思うと、そのまま地面に倒れた。

「……ったく！　こうなると思っていたよ畜生！」

　彼女が目を覚ましたら、きっと面倒になるだろうと思っていたシオン。だから、出来れば北門に置いておくまで目を覚まさないで欲しいと思っていたのだが……結局、予想通り面倒なことになり、半ばヤケクソ気味にそう叫び、ナイフを握る手に力を入れる。

　シオンの装備は、動きやすさを優先する代わりに防御力を削ぎ落としている。斧槍を一撃でもまともにもらえば、それがそのまま敗北につながるのだ。それは彼女も似たようなものなのだが。

「たったナイフ一本で、私に勝てると思うな！」

　そう叫んで、ラナシスタは斧槍を水平に一閃。シオンは一歩退って、穂先を顔面スレスレで躱す。そして、続けざまに振り下ろされた一撃を、今度は体を僅かに左に動かすことで空振りにさせ、地面すれすれで軌道を変え、足元を狙ってきたのをバク宙で避けた。

　シオンは、そのまま地面に足からは着地せず、腕立て伏せをするように伏せた。刹那、上空を刃先が通りすぎる。そして、腕の力で跳ね上がり、ラナシスタとの距離を取って、斧槍の間合いから逃げる――が、それは彼女も予測していたようだ。シオンが着地するころには、再び彼を攻撃の間合いに入れるとこまで迫ってきていた。

「おまっ、全力で殺しにきてんな！」

「は？　当たり前でしょう？」

　すぐさま横に一閃。かろうじて、シオンは上体を倒し、斧槍の柄をナイフで僅かに叩き上げることで躱す。そして思いっきりバックすることで、返しの一撃も何とか躱した。

「あなた達は、私達の敵よ！」

「その割には、クレアは殺さなかったな」

「……っ、うるさい！」

　クレアを気絶させた時、彼女はわざわざ、斧槍の刃がついていない石突の方で攻撃していた。刃のついた穂先の方で攻撃していれば、致命傷になったはず。鬼人とはいえ、彼女にしてみれば、クレアは人間に寝返った裏切り者だ。ここには、他に人はいない。生かしておく理由はないのだが。

　シオンはその事実が、さっきから頭を離れなかった。

　ふと、シオンはあの、メモリーシートのことを思い出す。もしあれに、この疑問を解決するなにかがあるのなら……。

「……よし」

　シオンはそう呟いて、覚悟を決めた。

　左斜め上空から襲いかかってくる攻撃を、シオンはその下をくぐるようにして避ける。続く背中に向けられた一撃は、前にダッシュして、敢えて柄のところを右腕で受けた。

　だがその反動で右手が痺れ、握られていたナイフがポロっと地面に落ちる。

　それを見て勝ちを確信したような顔で、ラナシスタは斧槍を思いっきり引いた。斧槍の斧の部分で、シオンの後頭部をえぐるつもりだ。

　流石にそれを受けるわけにはいかず、シオンは右足で地面を蹴って左に躱す。それでも僅かに、斧槍が耳元を掠めた。

そして、まだ彼女の攻撃は終わっていない。引いた反動を利用して、今度は突いてきた。そしてシオンも、同時に前にダッシュする。そして前回と同じように、シオンは首を僅かに傾けることで躱した。

だから当然、ラナシスタも前回同様、指の力で斧槍を回転させ、シオンを仕留めるつもりだったのだが――シオンは既に、彼女の懐に入り、自分の背中をラナシスタの体にピッタリとくっつけるようにして、密着していた。

彼はラナシスタの腕の下に自分の肩を入れており、それによって、斧槍の柄を、ラナシスタの腕とシオンの肩で挟みこんでいる。これで、指の力だけで斧槍は回せない。

シオンはラナシスタに密着した時の反動で、彼女が少し離れた隙を見逃さず、後ろを振り返り、その勢いで左腕を振る。

本当なら、それだけ。左手には何もないはずだ。が、

「――なっ？」

　その手には、ナイフが握られていた。

「いつから、俺のナイフが一本だけだと錯覚していた？」

　腰にぶら下がっている、予備のナイフ。さっき突きの攻撃を躱した時に、取り出したのだ。

「昔は二刀流だったんだよ！」

　片側だけしか刃がないナイフ。その、刃がないほうで、シオンはラナシスタの首元を目掛けて思いっきり振った。

　ラナシスタは辛うじて、仰け反ることでその攻撃を空ぶらせる。だが、僅かに地面を踏む彼女の足に、シオンは自分の足を引っ掛け、思いっきり引っ張った。

　体勢を崩したラナシスタだったが、斧槍を自身の後方に突き刺すことによって完全に倒れることだけは何とか防ぎ、逆にポールダンスのように斧槍を軸に体を一回転させることで、一瞬でシオンの背後に回る。

　完全に死角をとった。このまま離れて、もう一度斧槍の間合いに持ち込めれば……そう思ったラナシスタ。だが、

　シオンは、それを読んでいた。倒れそうになったラナシスタに追撃をすることなく、体を反転させていた。

　バックする彼女に、シオンはひたすら食らいつく。ラナシスタの右腕を目掛けて振られたシオンの斬撃を、斧槍の柄で弾くが、その反動による姿勢の低い回し蹴りで、シオンはラナシスタの足を払う。軽くグラついた彼女に、立ち上がり際にナイフのグリップの底で顎を狙う。

　だが、それは彼女にも予測されていたようで、斧槍の柄で防がれた。逆にその力で、彼女は体勢を立て直す。

　刹那、シオンの膝が、ラナシスタのボディに入る。入りはやや甘かったものの、軽くえづいたラナシスタの後頭部目掛けて、シオンはナイフのグリップの底で思いっきり叩く。シオンの膝が支点となって、彼女は一回転。

人間相手なら、これで伸びていた。

が、鬼人はシオンが思う以上に、頑丈だったらしい。

一回転したラナシスタは、そのまま背中から地面に叩きつけられることはなかった。咄嗟に地面に手を伸ばし、倒立前転の要領で落ちる勢いを殺し、上手く足から着地し、そのまま距離をとるため後ろに飛んだ。その間、斧槍を離さなかったのは流石としか言い様がない。

「諦めなさい、人間！　貴様じゃ私には勝てない！」

「ああ、勝てねーな……一人じゃ」

　この瞬間、シオンは自らの敗北を悟る。今からでは、距離を詰める前に斧槍の一閃を受けるだろう。そんな直感があった。

　でも、

「一人じゃ勝てねーが……」

　飛んだ先には、

「二人ならどうだっ？」

　シオンの言葉の意味を、ラナシスタが理解するより先に、

「がっ……？」

「そこまでです」

　ラナシスタは、いつの間にか覚醒していたクレアに拘束されていた。クレアはラナシスタと一緒に倒れこみ、体の自由を奪っていたのだ。

「なっ？　貴様は……っ？」

「よくやった、クレア！　そのままそいつを離すなよ？」

「ええ、分かっています！」

　それを聞いて、シオンはポッケに入っている、あの麻の袋を取り出した。

途端、その持ち主は目を見開く。

「か、返せっ！　返してくれっ！」

「悪いが見せてもらうぞ！　お前の記憶を！」

　シオンは麻の袋の中からメモリーシートを取り出して、親指と人差し指ではさみ、擦る。

　そして、自分の意識がブラックアウトしていくのを感じた。

夜が、赤く染まっていた。

季節は冬のはずなのに、ひどく暑くて、息苦しい。なにより、辺り一帯が煙と血と生き物の焼ける臭いで充満していたのが、ラナシスタ・アークヴェルをガクガクと震えさせていた。

来月十歳の誕生日を迎える、その少女は、知る。

これが、戦争。

傍から見れば、小国同士の、さらにその中でも一部の地域の民族同士の争いごとでしかないのだが、そんなことは彼女には関係ない。

　父と母は、きっと死んでしまった。敵の人間に見つかった時、親の最後の意地なのか、愛する我が子だけは逃がそうと、必死で抵抗したのだ。

もう、今までラナシスタが住んでいた家は戦火で焼けてしまった。今いるここが、かつて彼女達の住んでいた家のある場所だった。

戦いが終わるまで、ここに隠れていよう。そう思っていたのだが……屋根は吹き飛び、壁が壊れて玄関の方からは丸見えになっているここでは、隠れていられるのも時間の問題だろう。

もう、いいや。

　ラナシスタは、生きることを諦めた。親はいない。住む場所も失った。仮に生き延びることが出来たとしても、この先、生きていくあてはない。そう思って、彼女は目を閉じた。

　その時だ。

　少し離れたところから、声が聞こえてきた。

　彼女は、見る。自分と同じような年頃の女の子に、誰かに手を差し伸ばしているところを。

　だがラナシスタに、手を指し伸ばしてくれる人は、誰もいなかった。

　幸か不幸か、彼女は生き延びる。

　そして、場面が変わる。

　生き延びた彼女は、その後、鬼人の村で生活することになった。運良く、幼い彼女でも出来る仕事を斡旋してもらえたため、何とか生活することは出来ていた。

　そんな彼女を、憐れむ目。彼らに、悪意はない。

　ラナシスタは、独りだった。

　そこで、シオンの意識が戻る。何かを考えられるまでに、少し時間がかかった。

「君、は……」

　ようやく思考回路が戻ってきて、シオンはラナシスタの方に目を向ける。彼女はもう遅いと悟ったのか、ぐったりとした様子で、目を閉じていた。

　あの場面。ラナシスタが見た女の子は、クレア。ならば、彼女に手を差し伸べていたのは……。

　俺だ。シオンがそう気がつくのに、時間はかからなかった。

　これは、クレアのもう一つの未来。シオンは知らなかった。あの近くに、もう一人、鬼人がいたことを。

もし、シオンが見つけたのが、ラナシスタだったら。きっと隣にいるのは、クレアではなくラナシスタで、戦っていたのはラナシスタではなく、クレアだったのかもしれない。

そして、シオンは悟る。

「ラナシスタ、君は」

「言うな……」

「君は、羨ましかったんだな、クレアのことが……」

「言うなっていっているでしょっ？」

　今までで一番大きな声で、ラナシスタは叫んだ。

　そして、辺りが静まり返る。

「……ええ、そうよ」

　だが、やがて、彼女が観念したように、ポツリポツリと話し始めた。

「羨ましかったし、恨んだわ。どうしてこの子は助けてもらえて、私は独りなんだろうって……。たまにマートスに食料を調達しに来た時、この子の姿を見ると、いつもあなたが一緒にいて、楽しそうで、思わず殺してやろうかって思った」

「でも、出来なかった。そうだな？」

　シオンの言葉に、ラナシスタは頷く。

「馬鹿よね、私。人間なんて殺したいほど憎んでいるはずなのに、あなたと一緒にいるこの子の顔を見ていたら、もしかしたら、私にもこんな未来があったのかもって。そう思ったら、もう彼女への殺意なんてなくなった。私の手で、『幸せな私の未来』を奪うことなんて、できなくなった」

「……俺達を襲ったのは、どうしてだ？」

「さあ、なんでかしら？」

　そんなことを宣ったラナシスタ。だが、時間をおいて、口を開く。

「彼女への羨望が七割。憎しみが三割。三割分の憎しみを、ぶつけずにはいられなかったのかもね」

　それが本当のことなのか、それともただはぐらかしているだけなのかは、シオンとクレアには分からない。

　だが、それを聞いて、思わずシオンはこう言っていた。

「ラナシスタ。今から幸せになる気はないか？」

「……はぁ？」

　変なものを見るような顔をした彼女に、シオンは自分達の目的を話す。『人間と鬼人の共存』の夢を。

「……馬鹿みたい。出来るわけないじゃない」

「出来るわけない、じゃなくて、やるんだよ。まあ、確かに今のままじゃ無理かもだけど……なあ、ラナシスタ。俺達の家、あと一人は生活できるスペースがあるんだが、

　俺達と一緒に、暮らさないか？」

　そう言って、シオンは手を差し出した。

　ラナシスタの頬を、透明な液体が、ツーっと流れた。

　そして、数日後。

朝。小屋で、今日もクレアが正座させられていた。

今までと違うのは、正座させるのがもう一人増えたところだ。

「クレア……どうして自分のベッドで寝ないんだ。いや、まあそれはいつものことだが……」

　怒るシオンの目は、明後日の方を向いていた。

「なんで……なんで服を脱いでるんだよっ？　悪化すんな！」

「えーっと……たまたま？」

「んなわけあるかぁっ！」

「全く……朝から馬鹿みたい」

「ラナ。他人事のように言っているけど、君も人のことを言えないからな？　なんで二人揃って服を脱いで、こっちの布団に潜り込むんだ！」

「たまたまよ」

　ラナシスタの言葉に、溜息を吐くシオン。

　手狭になるのを我慢して買ったベッドは、早くも無駄になりそうだった。

「ほら、着替えろ！　朝飯食って、仕事だ仕事！」

「はーい」

「はいはい」

　ラナシスタは、今日から正式に、シオン達の仲間になった。

　今日から、三人の日々が始まる。